

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

最終報告提出日：2011年8月19日

報告者：大歳 剛史（南欧語南欧文学博士課程）

派遣形態：PD

研究課題名：人文主義萌芽期における古典教養体系の継承と展開
—初期自筆写本にみられるボッカッチョの古典教養の実態—

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

イタリア、フィレンツェ、ラウレンツィアーナ図書館（Biblioteca Medicea Laurenziana）

(2) 派遣期間

2011年2月7日～2011年7月31日（総滞在日数175日）

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

ボッカッチョの初期の三つの自筆写本について調査を行う。Zibaldone Laurenziano, Miscellanea Latinaに収録される雑多な作品の研究を通じて、この時期のボッカッチョの天文学・占星術、修辞学といったラテン語教養の実態を明らかにする。また、『テセイダ』自筆写本に彼が自ら付した註釈の分析を中心に、彼がこのようなラテン語教養をどのようにイタリア語の物語作品に応用しているかについて研究を行う。

(2) 実際に達成された成果

・ボッカッチョの二つの自筆写本の画像データを入手し、収録されている作品をリスト化するとともに、校訂版や研究文献の収集・調査を行った。また、写本を直接読むための知識の習得および写本読解の実践に努めた。

・中世における写本の実態について調査を行った。特に14世紀フィレンツェの商人階級における写本の流通や、先行研究が『デカメロン』自筆写本の分析を通じて明らかにしたボッカッチョの写本の作成やその普及の実態を調査し、初期写本の分析を行う上での背景知識を深めた。また、4月28日～5月4日にスポレートのイタリア初期中世研究所

(CISAM) で行われた「中世初期における読むこと、書くこと」をテーマにした研究週間に参加した。

・『テセイダ』自筆写本の註釈について分析を行った。後期のラテン語による学術的著作の特徴である、神話を歴史的に解釈して合理化するエウヘメリズムの傾向がすでに見られたことは、ボッカッチョの教養形成の過程を考察する上で重要な視点となる。また、註釈で言及されているディーノ・デル・ガルボのカヴァルカンティのカンツォーネへの註釈がボッカッチョの初期俗語物語作品に与えている影響について調査を行った。

(3) 今後の研究展望

ボッカッチョの初期自筆写本の画像データおよび関連する資料を収集するとともに、文献学的、古文書学的背景知識を深められたことで、本格的な写本研究が可能となった。収録された作品の量は膨大であるため読解および分析は今後も継続しなければならないが、天文学・占星術や、misoginia（女嫌い）を扱ったテキストなどは事前に推定していた以上にボッカッチョの初期物語作品に影響を与えていそうである。さらに調査を進めてこれを実証することができれば、画期的な研究成果となるだろう。

また、(2)で挙げたディーノ・デル・ガルボのカヴァルカンティのカンツォーネへの註釈は、従来の研究では指摘されていなかったが、ボッカッチョの初期物語作品における「愛」の理論的根拠となっていた可能性がある。この関係を網羅的に実証するにはさらに調査を進める必要があるが、まずはこの註釈とボッカッチョとの関わりについて十月に行われるイタリア学会で研究報告を行う予定である。